J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol.11, No. 1(2006) 7～16

言語理論と英語教育(12)

――ストラテジーとしてのパラフレーズ――

田 中 彰 一

Linguistic Theory and English Teaching (12)
— *Paraphrasing as a strategy* —

Shoichi TANAKA

Abstract: Paraphrasing is a skill which we use to facilitate and move communication. The idea of paraphrasing as a strategy has been advanced in the second language acquisition research. This idea can provide intermediate level students with an efficient way of developing their own interlanguage for English. It also gives them a more flexible attitude to communicate in Enlish since they can compensate their lack of knowledge about English when nessesary. This stands against the idea that language and meaning always have a one to one correspondence, which seemingly underlies the English education oriented to entrance exams.

Key words: paraphrase, strategy, interlanguage, SLA

1．英語能力

言語の基本スキルは一般に四技能（リスニング、リーディング、スピーキング、ライティング）と言われているが、実際のコミュニケーションにおいてそれらの技能が別個に用いられていることはめったにないと考えてよい。なぜならば、四技能を支える言語の仕組みは同一のものであり、さらに言語使用に際して、それらの四技能すべてにはたらく文法、発音、語彙などの補助的な言語能力が共通してあるからである。したがって四技能は相互に関連しており、英語学習においても技能は独立に発達するのではなく相関的に伸びていくと考えられる。

第二言語習得（SLA）研究で仮定されているように、外国語のための中間言語（interlanguage）という能力を学習者が発達させていくという立場に立つと、図1のように、学習者は基本的に入力 input と出力 output をおこなう学習活動を通して英語を運用するための知識を身につけていく。

この考え方が正しいとすると、学習者は個別に技能学習するのではなく、学習の結果が英語運用のための知識として蓄積されるように、英語の入力と出力における学習活動に参加しなければならない。

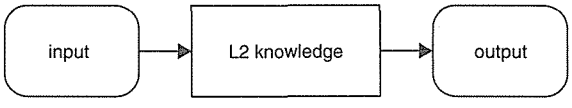

図1

文化教育学部教科教育講座

本稿は、入門期の学習が終わった段階後の中級レベルの学習者[1]が、英語のための中間言語を発達させるためのストラテジーとしてどんなことを想定するべきかを考察する。特に、ストラテジーとしてのパラフレーズが果たす役割は従来考えられている以上に重要であることを指摘する。

2．学習者のストラテジー

一般にストラテジーは学習ストラテジー（Learning Strategy: LS）とコミュニケーションストラテジー（Communication Strategy: CS）に大別される。LSは学習者が英語を理解したり、記憶したりする際に用いる特定の方法や行動であると考えてよい。それに対して、CSは、コミュニケーションに支障が生じた際にそれを修復する方法である。Tarone（1981：290）が指摘しているように、LSとCSの違いは学習者の意図に基づいている。つまり、学習者が特定の方法を英語学習のために用いていると判断されればLSと定義され、コミュニケーションのために用いていると判断されればCSとなる。[2]

2.1. 学習ストラテジー

2.1.1. O'Malley *et al*.(1985) の分析

外国語を学習する際には、個人差があるにしても、外国語を効果的に習得しようとする上での学習者に共通したなんらかの計画や工夫があると考えられており、それらが学習ストラテジー（LS）と呼ばれている。[3]LSにはOxford（1990）の詳細な分析があるが、ここではO'Malley *et al*.(1985)の分類と調査を紹介したい。それによると、LSは大きく2つに分類される。

(1) A．メタ認知（metacognitive）ストラテジー
　　B．認知（cognitive）ストラテジー

メタ認知ストラテジーとは、学習者が自身の外国語習得をメタ的にとらえておこなう工夫であり、9のストラテジー[4]が提案されている。それらは、注目(attention)、準備(preparation)、自己管理(self-management) などのプランニング、英語の正しさをチェックするモニタリング、英語学習をチェックする評価（evaluation）に分けられている。これに対し、実際の英語学習自体とかかわる活動が認知ストラテジーである。O'Malley *et al*.（1985）の研究によれば、初級と中級のレベルの英語学習者に関して、メタ認知ストラテジーより認知ストラテジーの使用の方が多いという結果[5]になった。その例の数によるまとめは次である。

(2)

ストラテジー	初級	中級
メタ認知	112	80
認知	297	149
合計	409	229

この結果から言えることは、認知ストラテジーの使用例は、初級クラス中級クラスに共通して、メタ認知ストラテジーのそれの約2倍になっていることである。実際、対比は69.9%対30%になっている。

(1B)の認知的ストラテジーを具体的に見てみよう。このタイプのストラテジーは実際に英語の発音、語彙、文法の知識を記憶し習得するための工夫である。17のストラテジーがあげられている。O'Malley *et al*.(1985：39) の調査によると、これらの認知的ストラテジーは同じ頻度で用いられるのではなく、差があり、次の順序で後になるほど多く使用されるという結果となった。

(3)
a．動作反応（動作で関連づける）
b．キーワード（語を手がかりで記憶する）
c．演繹法（規則を当てはめる）
d．再配列（組み合わせをし直す）
e．グルーピング（語順変更、再分析）
f．音表示（音の保持）
g．同化（既存の知識との関係づけ）
h．コンテクスト化（コンテクストの意識）
i．回復（英語で指されている物の利用）
j．推論（推測のための情報を使う）
k．転移（第1言語の知識を利用）
l．翻訳（第1言語を使って学習する）
m．イメージ（図などによる視覚化）
n．質問（繰り返し、説明などの依頼）
o．筆記（要点、まとめなどをメモする）

p．協力（学習する仲間と言語活動をする）
q．繰り返し（記憶のために反復）

上で見たように、これらの認知ストラテジーの使用例がメタ認知ストラテジーの使用例より多いということは、これらのストラテジーがより実際的に学習者の英語習得に貢献しているとすることができよう。さらにここで注目すべきは、(3k)「転移」(7.8%)と(3l)「翻訳」(8.5%)は広い意味でどちらもパラフレーズ「言い換え」による方法であり、合計すると16.3%となり、もっとも多いとされた(3q)「繰り返し」(14.8%)より大きい割合を占めることになる。したがって、パラフレーズが関わるLSの頻度は決して低いものではないと言うことができる。

2.1.2. Ellis（1985）の提案

Ellis（1985）によれば、英語発話能力の発達は次の2段階より成る。

(4) Formulaic Speech→Creative Speech

つまり英語の表現能力は「きまり文句的発話」から「創造的発話」へと発達する。Ellisによれば、初級のきまり文句的発話は右脳による処理の可能性が高く、言語の創造的機能をもつ左脳によるのではないと考えられる。そのレベルでの学習ストラテジーは主にパターン記憶（pattern memorization）による。そのため、きまり文句的発話レベルでは、I don't know.やWhat's this?などの表現や空きスロット（open slot）が臨時に埋まるだけのCan I have a _____?やThere is no _____.等の表現が頻出する。一見、文法的に問題のない発話が繰り返されるため、流暢に話しているようにきこえるが、創造的な発話には至っていないとされる。このきまり文句的レベルは、たとえば、以下のような「英会話入門」的なスキットに見られると分析できる。

Mary: Hi, Yuko, how was your weekend?
Yuko: Friday night I went to karaoke with my friends. And Saturday my husband and I went shopping. I was lucky because we found a Coach store, and there my husband found a very nice jacket on sale. And he bought it for me.
Mary: That's so sweet.
Yuko: What did you do, Mary?

一見するとこの会話は創作的になっているように見えるが、How was/is _____?やI went to _____.などの空きスロットが埋められて出てきた定型表現に基づいていると見ることができる。したがって、このレベルは英会話の初級レベルや英語の日常的な慣用表現のレベルであり、それらの表現を記憶するための繰り返し練習が効果的な初期の学習段階とみなすことができる。

これに対して、創造的発話では学習者が中間言語の規則による「創造的な」表現段階に達していると考えられており、その段階の学習ストラテジーは次の過程にまとめられる。(Ellis（1985：175))

(5) a．仮説形成段階：
　　簡素化
　　（i）一般化
　　（ii）転移
　　推論
　　（i）言語内推論
　　（ii）言語外推論
　b．仮説検証段階：
　　受容的検証
　　生産的検証
　　メタ言語的検証
　　相互的検証
　c．自動化段階：
　　形式的演習
　　機能的演習

この過程が正しいとすると、学習者は自分の中間言語の規則を仮説として形成(5a)し、検証(5b)し、自動化（5c）していくということになる。詳細はEllisに譲って、ここでは、(5a)仮説形成の段階でパラフレーズの要素があるということを指摘したい。簡素化（simplication）とは規則化していく過程で簡単にする傾向があるということであるが、その段階で転移（5a ii）は第1言語を利用して第2言語についての仮説をつくる際の基礎に

なる。前節で見たように、この転移（transfer）の認知ストラテジーにはパラフレーズ（言い換え）という操作がはたらく。さらに、(5a i）の一般化（overgeneralization）は既存の英語の知識を新しい入力形式の学習に拡大適用するというストラテジーであり、Ellis（1985：171）によれば、すでに習得している英語の知識を使ってさらに中間言語の内容を豊かにするということを意味する。したがって、その学習段階は当然英語によるパラフレーズを含むことになる。

以上のことから、Ellis の提案が正しいとすると、学習者が中間言語の規則による「創造的な」表現段階に英語を発達させる際、初期の段階つまり仮説形成段階においてパラフレーズのストラテジーは重要な役割を担っていると言うことができる。これまでこの視点に十分な配慮がなされていないと思われる。

2.2. コミュニケーションストラテジー（CS）

この節の最初で述べたように、CS はコミュニケーションに支障が生じたときに補完するコミュニケーション能力の一部と考えられるのが一般的である。Canale and Swain（1980）が示したように、コミュニケーション能力の構成は以下のような四つの能力だと言われている。

(6) a．言語能力（linguistic competence）[6]
b．社会言語学的能力（sociolinguistic competence）
c．談話能力（discourse competence）
d．方略的能力（strategic competence）

発音、語彙、文法という言語能力(6a）に基づいて英語表現の理解と生成がおこなわれるが、外国語の場合は母語ほどの自然な表現にはならない場合がある。そのため言語能力が不足してもコミュニケーションを維持・修復するためのストラテジーの能力(6d）が必要になる。

具体的に見るために、よく知られている Tarone（1981：286）の分析を見ることにしよう。

(7) a．パラフレーズ（paraphrase）
近似表現（approximation）
造語（word－coinage）
遠回し的説明（circumlocution）
b．借用（borrowing[7]）
逐語的翻訳（literal translation）
置き換え（foreignizing）
c．質問（question）
d．まね（mime）
e．回避（avoidance）
トピック回避（topic avoidance）
途中回避（message abandanment）

これらのストラテジーはコミュニケーション上の態度から「取り消し型」と「達成型」に分けることができる。[8]取り消し型は（7e）の回避であり、いわばコミュニケーションを仕切り直すためにトピックや作りかけの文を放棄してしまう方法である。他のストラテジーはすべて達成型である。話し手がコミュニケーションを修復するためになんとかメッセージを伝達しようとする態度を持ったまま、試みる方法になる。

（7a）のパラフレーズは言い換えを用いるやり方であり、Tarone の例示では、waterpipe の代わりに pipe で代用したり、horse の代わりに animal とする近似表現タイプ、balloon を思いつかずに airball のような新造語を創り出すタイプ、tobacco を忘れて“She is, uh, smoking something. I don't know what's its name. ...”のように遠回し・説明的にいうタイプの３種類のパラフレーズがある。(7b）の借用は英語から表現を借りて翻訳的に説明するタイプと、翻訳せずに第１言語をそのまま英語表現の一部で置き換えて使ってしまうタイプの２つがある。

Tarone の示す前者の例は、They toast one another. の代わりに He invites him to drink.を使う例が示されている。後者の例としては、英語の表現の一部を日本語ですませてしまうような場合を考えることができよう。たとえば、stapler を思い出せず、Do you have a hotchkiss?と言ったり、sparrow と言わずに That's a suzume.で済ます場合がこれにあた

る。

(7c) は相手に質問し答を求めることでコミュニケーションを続けるようにする方法で、What is this?や What do you call this?などネイティブスピーカーの知識に訴えかけるやり方である。(7d) は身振り手振りでなんとかメッセージを伝えようとする方法である。

ここで注目したいのは、(7a) (7b) (7d) のストラテジーが、広い意味でのパラフレーズ、すなわちなんらかの「言い換え」の手段を用いていることである。つまり、より的確な英語の表現が別にあることを知っており、それを忘れてしまったり、うろ覚えでその場で使えないために、「言い換える」ことでコミュニケーションを補完しようとする態度であると言うことができる。(7a) は文字通りパラフレーズの技術であり、言い換えであることは問題ない。近似表現、新造語、遠回し表現は、求める表現の置換になっている。(7b) の借用は、英語の同意語を使ったり、第1言語を借用するという置換と言える。(7d) は、身振り手振りによる言い換えと言える。

しかも Bialystok (1990：77) の報告によれば、使われるコミュニケーションストラテジーの配分は遠回し説明がもっとも多く、80%になっている。(その調査では18人の外国語学習者にコミュニケーションギャップがある状況で発せられた324発話を分析した結果が報告されている。) 2番目に使われるストラテジーが近似表現であり12%。どちらも (7a) のパラフレーズに分類されている。つまり、パラフレーズ型のストラテジーは使われるストラテジーの中で実に9割以上の頻度となり、実際のコミュニケーションにおいて「言い換え」が頻繁に用いられていることがわかる。したがって、コミュニケーションにおいて、パラフレーズの技術は重要性が非常に高いと言うことができよう。

3．ストラテジーの教授可能性

日本の英語教育では大学受験のための対策もあって、(6a) の言語能力の習得、すなわち的確な表現を記憶し用いることができること、往々にしてそれらを知識として知っていることが求められてきた。しかしながら、実際の英語コミュニケーションでは、的確な表現が思いつかなかったり忘れてしまっていることがしばしばあるのが現実ではないであろうか。これは第1言語についても起こることであるから、至極当然の事態であるとまず認識したい。

そのため、初級の段階を終了したレベルあたりから、英語でのコミュニケーションで支障が生じた場合にそれを補完するストラテジーを身につけておくべきだという議論が成立する。同時に、どういうストラテジーがあるのかという定義と分類の問題がある。しばしば指摘されるように、第2節で見た LS と CS は別個のものではなく同じ性質を有しており、CS が自分の英語学習を効果的に進めていく LS にもなりうると考えられている。[9]

(7)で見た Tarone の分析は、草分け的な研究として引用されることが多いが、CS には複数の提案があり、合意された定義があるわけではない。さらに、英語教育上、より重要な問題提起は、そうしたストラテジーはそもそも教授可能であるのかの議論である。

この節では，まず Dönyei (1995) の議論にしたがって、ストラテジーを教えることがどのように考えられているのかを確認しておく。

まず、ストラテジーは第1言語で発達するので第2言語で用いるのは容易であり、教授は不要であるという立場がある。英語を知れば知るほど、学習者はより柔軟に必要事項を満たすことができるようになる。つまり CS は実際のコミュニケーションで習得されるのであって、教室での演習では身につかないという立場である。これと並行して、多くの研究者がストラテジーの訓練は可能であり望ましいことだと考えている。

ではなぜこのような相反する立場があり矛盾が生じているのであろうか。Dönyei (1995：61) によれば、その要因は以下の3点である。

(8) a．ほとんどの議論が間接的な証拠に基づいている。
b．ストラテジーには教授可能性に差がある。
c．教授される内容にさまざまな解釈が可能である。

(8a) は、体系的なストラテジー訓練の調査が教授可能性に関してほとんどなされていないという背景があるという指摘である。(8b) は、そもそも個々のストラテジーの教授可能性に差があると考えられるのに、これまでの研究では多くても2つほどのストラテジーに基づいており、それをCS全体に一般化して考える傾向があるということを指摘している。さらに、(8c) では、CSを教えることの内容がさまざまに解釈されており、何をもって教授可能であると言えるのかにいろいろな解釈が出てしまうという指摘がなされている。その解釈の例として次のような内容がある。

(9) a．学習者の意識を高めること。
b．生徒にCSを使うようにすすめること。
c．第2言語におけるCSのモデルを示すこと。
d．異文化上の違いを高めること。
e．CSを直接教えること。
f．CS演習の機会を与えること。

このように、CSが「教授可能であること」の意味はいろいろであり、一定の共通した内容になっていないために、相反する見解が出てくるということになる。

Dönyeiはこれらの要因を整理したあと、CSを教えることが英語学習に役に立つのかどうか実験的なデータを得るために、3つのストラテジーに焦点をあて、6週間の演習授業計画を実践した。被験者はハンガリーの5つの高校に通う109人の生徒で、8クラスのグループに分けられており、4クラス53名にCS指導がおこなわれ、残りの4クラスは比較のためのコントロールグループとなった。3つのストラテジー[10]は、話題回避、遠回し的説明、沈黙を埋めたり躊躇を示すストラテジーである。最後のストラテジーは、いわば「時間稼ぎ」のストラテジーで、会話にとどまることによってコミュニケーションを保持しようとする方略になる。残り2つのストラテジーはすでに(7e) と (7a) で見た内容である。言うまでもなく、(7a) で見た遠回し表現のストラテジーは、本稿で注目しているパラフレーズの方略のひとつである。

実験内容と結果の分析の詳細はDönyei (1995) に譲るしかないが、すべての生徒がプログラム前にTOEICを含む筆記試験と口頭試験を受け、演習後にも口頭試験を受けた。演習の英会話は録音され文字化された。結果に関しては、あまり決定的な結論を得られてはいないが、CS教育を受けたクラスはストラテジー使用の質と量において改善が見られた。特に遠回し的説明の質の向上と沈黙埋め・躊躇の量が増えたことは，ストラテジー教育の効果と結論づけられている。事前事後の英語試験の比較分析によって、やはり教育を受けたクラスに改善が見られることから、ストラテジー教育に効果なしとするのは間違いであり、長期の計画をしてみればCSを直接教えることは英語能力のより顕著な改善が期待できるとDönyeiは報告している。

4．パラフレーズの効果

Dönyei (1995) がおこなった実験的プロジェクトでのストラテジーの指導は、(i) 回避に関しては教師によるデモンストレーションにならって生徒が演習するというものであり、(ii) 沈黙埋め・躊躇のストラテジーはそのための表現 (well, now let me see, as a matter of fact, you know など) を収集分類し、ダイアローグをしながら使ってみるという演習である。(iii) 遠回し的説明の指導は、辞書の定義を比較し、効果的な表現を探すというものである。生徒は英語で物を記述したり、より抽象的な概念を英語で説明する活動を課される。さらに関係詞節を使った定義型の英語構造を作ったり、言語ゲームをおこなったようである(論文には具体例は報告されていない)。この遠回し

的説明は、上でみたようにパラフレーズの技術であり、Dönyei（1995：66）も指摘するように、会話修復のためのもっとも重要なストラテジーとみなされている。またストラテジー指導においても直接教えることの効果が期待されるものである。

そこで、ここではパラフレーズのストラテジー養成のために、（教室で）ある程度学習が進んだ中級程度の英語学習者が、自分の英語能力をさらに伸ばすために、ストラテジーを意識しながら英語を学習する可能性を探ってみよう。この学習者にとって注意すべきことは、学習材料としての英語の素材があまりに難しい内容、たとえば使用される語彙の半分以上が理解できないという場合である。そのため、Krashen のインプット仮説[11]から予測できるように、ｉ＋１の程度の「理解可能な（comprehensible)」教材内容でパラフレーズが多用されているようなものが望ましいであろう。

しかしながら、自然（authentic）な素材にしろ、考案された教材にしろ、パラフレーズがポイントとなっている教材は少ないようである。そのため、本稿ではより身近なメディアによる演習的な学習素材でパラフレーズの訓練になるような教材に注目したい。それはリスニング教材による聞き取りでインプット型、いわば「自習型」の演習である。これはストラテジーとしてのパラフレーズの重要性がわかっている学習者が、コミュニケーションを補完できるように多くのパラフレーズを入力してストラテジーの意識を高め、（6a）の言語能力も発達すると期待できるものである。次の一節を見てみよう。

It's true that I don't like shopping. When I want to buy something, I do it **online**. I like buying on the Internet because I can easily do some **comparison shopping** and find the best price. It's easy, too.

Last week I wanted to buy some new **headphones**. I did a search and found a **pair** on sale at a store in New Jersey. I read the **product description** and knew that this was the right one. I added it to my **shopping cart** and I was ready to **check out**. The screen showed that I had one **item** in my **basket** and that it was **in stock**. I had a choice of **shipping** and I picked **standard** shipping for $5.95, rather than the **expedited** shipping for $12.95. I clicked the "continue" button and **filled in** my shipping address and my **billing** address. Then, it took me to the payment screen and I typed in my credit card number and expiration date. I clicked the "Purchase" button and I was done. I got a **confirmation page** with a **tracking number**. I checked the next day and it showed that my item had already been shipped.

Buying on the Internet is perfect for someone like me. Now, if only finding a girlfriend was just that easy...

これはインターネット上で Podcasting（iPod と broadcasting からの造語）という技術による英語学習番組からとった１回分の配信に使われているテキストである。この番組は ESL Podcasting[12]で、ESL（English as a second language）の専門家である Lucy Tse 博士と Jeff McQuillan 博士を中心とするボランティアチームによって運営され、アメリカのロスアンジェルスから配信されている。１回分が三部構成になっており、最初ゆっくりと３分ほどのスクリプトが流された後、パラフレーズによる説明、そして通常の速さのスピードのスクリプトを聴くという構成になっている。

この英語学習番組のユニークな点は、10分以上の第２部が英語によるパラフレーズの説明になっている点である。引用したテクストの太字体の部分の表現を中心に、McQuillan 博士のパラフレーズを駆使した説明がなされる。たとえば、最初の太字体の **online** については buy something online という句が抜き出され、doing it on the internet, buying over internet の言い換えが（口頭で）なされる。次の **comparison shopping** に関しては、when you can compare or look at two different stores, or three different stores, or ten different stores, and see which store has the cheapest price, that's comparison shopping, looking at different stores and getting their prices というふうに遠回し表現のパラフレーズ例となっている。

さらに、**headphones** は those things you put on your ears, to cover your ears, to listen to music or a podcast, or whatever you want to, the eh, we usually say the headphones that sometimes we say という説明や or the types of earphones that go on to your, just on to your ears which don't cover your whole ears are, we say, ear buds. iPod has white ear buds but headphones, the old type of headphones is the one to cover or hold your whole ears, and we usually say, this is a pair of headphones というふうに、関連する対比的情報も付加される。次の **pair** は two, **New Jersey** は a state on the east coast of the United States right next to New York と近似表現や遠回し表現で言い換えられていく。

さらに、**product description** は some sort of sentence or paragraph that tells you or gives you more information about the product となっており、日本語で「製品解説書」や「取扱説明書」となるべきものを英語のネイティブがこういう表現で言い換えるということも学習できる。その句の中の **product** も just the thing you are buying, whatever you are buying と、この文脈に沿った遠回し表現でパラフレーズされる。

次の **shopping cart** はネットショッピングではメタファーとして使われている内容を次のように遠回し表現でパラフレーズする。

It is normally in a store, like a grocery store, a supermarket, it's what you push that you put all of your food into this big, eh, it's like a big basket that has wheels on it, you can push it, but in an internet store, the shopping cart is where you put things you want to buy, and you can put things into your shopping cart. If you change your mind you can take out of them, it's like a place where eh the internet store holds the things you are interested in buying.

このように **cart** が物ではなく、サイト上では場所として扱われているという説明になっている。

こうした工夫は他にも多く試みられており、現実生活に合った具体的パラフレーズが多く、単に辞書の定義のような学術的な解説にならないよう考案されているようである。(引用した一節には他にも太文字の部分があるが、それらの説明表現は紙幅の関係で割愛する。)

以上概観した学習内容は、上で述べたように、Podcasting の番組であるが、中身は MP3のオーディオファイルであり、インターネット上で配信される。それを受ける方のソフトは iTunes[13]であり、MP3の管理と iPod という携帯型のデジタルオーディオプレーヤーとの接続・データ書き換えもすることができる。

iPod は音楽用としてだけではなく、語学学習の教材提示としても注目を集めている。[14] iTunes にはさらにネットショッピングの機能もあり、2005年夏から iTunes Music Store (iTMS) と接続することができ、その環境で Podcasting の技術を使えるようになった。こうした iTunes による一連のデータ配信システムはアメリカの Apple 社の開発であり、その先駆性を世界的に評価され多くの賞を受けている。

ESL Pod は、そうした技術を背景にして英語教育のための良質な教材と知識を提供しようという外国語学習の Podcasting の一つと言える。2006年6月28日現在でスクリプトの番号は176になっており、「長期番組」でスクリプトが頻繁に更新されている。世界中に7000人以上の購読者がいるようである。

では実際にこのようなパラフレーズを多用した教材による自習の利点または効果はどんなことであろうか。またその根拠としてどんなことが考えられるであろうか。

第2言語学習には個人差もあり、さまざまな要因が関係するが、第2節で見た学習ストラテジーとコミュニケーションストラテジーを意識しながら、(6a) の言語能力を高めていくということは効果的な学習方法であると言うことができる。第2言語学習は、第1言語の知識が背景にある中で学習が進行するため、初期の段階で英語表現とその意味が1対1に対応するという固定された観念から発生する翻訳的な捉え方がどうしてもあるようである。

その次の段階では、第2言語も第1言語と同じように表現と意味が固定されたものでなく、「言い換えがきく」関係であるという意識が必要になる。つまり，英語を使う際にいつも的確な表現が使えるとは限らないことを知っておく必要があるということである。これは、英語が第2言語（外国語）であるということから、当然のことであると言える。したがって、的確な表現を補償できるという言語認識がなければ、学習者は英語の運用に自信を失ってしまい、学習意欲も減少してしまいかねない。それを回避するためには、パラフレーズを中心とするストラテジーの習得が不可欠なのである。[15]

そのようなストラテジー習得のための演習として、日頃からパラフレーズが多用されている教材による自主的な学習は、教室における学習を補充するばかりでなく、学習ストラテジー習得の側面からも意味があることと言えるであろう。(5)でみたように、学習者が自ら中間言語の仮説を検証しながら英語のコミュニケーション能力を高めていくという視点から見れば、このような学習は独立した学習者（independent learner）の営みと見ることができるのである。

5．実際のコミュニケーションのために

ではなぜひとつの表現ではダメなのか？（6a）の言語能力を高めるためには、言い換えるより的確な言語表現を完全に使えるようにすることの方が重要であるという反論があるかもしれない。しかしながら、実際の言語コミュニケーションでは、むしろそのような学習態度の方が問題だと言える。一部の試験を指向した英語教育での完全主義や誤りを極端に嫌う傾向から離れる必要がある。

これまでの議論から結論は明白であるが，まず表現と意味が1対1に対応するという考え方では融通が利かず、柔軟な相互理解に導くコミュニケーションは難しいといわざるをえない。情報を受けるという入力においても、表現の出力においても問題が生じることが予想される。

たとえば、挨拶レベルの表現においてさえ、How are you?と What are you doing?さらには What's up? などが会話上の同じ機能をもつパラフレーズの関係にあることを知っていることは英語の会話では必須のことである。さらに、自然（authentic）な英語ではよく確認のためのパラフレーズがおこなわれる。たとえば、お金を数える際、銀行などで＄1000は one thousand dollars だけでなく、確かめるために ten hundred dollars という表現を使うことがある。00を “double O” と言われたら、“zero zero” で繰り返すことも考えられる。間違わないための工夫をしているのである。レストランで shepherd's pie を注文しても、waitor が cottage pie とか meat and mashed potato pie という表現で確認をとることがある。これも説明的なパラフレーズ表現を用いることで、注文された料理に勘違いがないかどうかの確認をとり相互理解を図っているのである。もっと言えば、多少不自然な表現になっても、トラブルを避けたり、意思疎通をするために、パラフレーズ表現が用いられるということになる。

パラフレーズの技術は、ポライトネスにとっても重要である。She is pregnant.という直接的な表現でなく、She is expecting.という婉曲的なパラフレーズ表現があるのは、相手の気分を害さないために必ず必要なことである。英語に限らず、丁寧である必要があるときは丁寧表現、くだけていいような場ではうちとけた表現を使うのはことばによるコミュニケーションの原則[16]と言えるであろう。

さらに、英語のライティング、とくに論文構成などのアカデミックなライティングでは、パラフレーズの技術が要約（summarizing）や引用（quoting）の技術と共に必要となる。これは相手の考えを自分のものとして提示するという剽窃の問題を避けるために、必ず必要になる書き手の技術になる。また同時にパラフレーズすることで、書き手がどう理解しているかを示すことにもなり、ライティングの基本技能と言うことができる。

このようにストラテジーとしてのパラフレーズは、実際のコミュニケーション活動において重要な役割を果たしていると言うことができる。中級の学習段階ではいつも的確な表現ができるとは限らないことを認識し、近似表現や説明的なパラフレーズでコミュニケーションを補償しなければならない場合があり、また英語学習もそれを意識したものにする必要がある。このような言語学習の態度は、ことばの本質的特徴として、表現と意味が1対1になっていなければいけないという発想ではなく、他のもので言い換えられるという柔軟な態度でコミュニケーションができるという余裕のある発想に基づいている。

註

[1]このレベルは日本の高校生から大学生の英語能力を想定できる。

[2]Tarone が述べているように、実際には区別できない場合がある。定義上は区別されるとしておく。

[3]Johnson and Johnson (1998: 195) によれば、LS の定義は techniques used by second language learners for remembering and organizing samples of L2となっている。

[4]詳細は O'Malley *et al*.(1985：38) を参照。

[5]調査は70名のスペイン語話者達の ESL クラスでおこなわれた。調査方法は、面接と授業観察による。

[6](6a) の言語能力は grammatical competence とされるのが一般的であるが、文法の力のみを指すわけではないので、ここでは linguistic competence を用いている。

[7]後の研究ではこの内容に transfer（転移）を当てることが多いようである。

[8]Dönyei（1995：59）は(7)以外に「時間稼ぎ」型のストラテジーも CS としてカウントすべきであると議論している。第3節の議論を参照。

[9]おそらく認知的に同じプロセスがはたらいていると考えられるが、その解明は今後の課題である。

[10](7)を参照。Dönyei は、Tarone の(7)より多くのストラテジーを設定している。詳しくは Dönyei（1995：58）を参照。

[11]詳細は Krashen の一連の研究を参照のこと。たとえば、Krashen（1987：20-30）に仮説の詳細が述べられている。

[12]サイト URL は以下である。

http://www.eslpod.com/website/index.php

[13]Windows 版と Macintosh 版がある。

[14]古川（2006）を参照。

[15]2.2.節で見たように，もっとも使われるストラテジーがパラフレーズの中でも「遠回し的説明」であったことを想起されたい。(7)の表参照。

[16]たとえば、そのような表現集としてホーリー・赤川（1996）が参考になる。

参考文献

Bialystok, E. 1990. *Communication Strategies*. Basil Blackwell.

Canale, M. and M. Swain.1980. "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing," Applied Linguistics1, 1-47.

Cook, Vivian. 1993. *Linguistics and Second Language Acquisition*. MacMillan Press.

Dönyei, Zoltan. 1995. "On the teachability of communication strategies," *TESOL Quarterly* 29, 55-85.

Ellis, Rod. 1985. *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press.

Ellis, Rod. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.

Faerch, C. and G. Kasper. 1984. "Two ways of defining communication strategies," *Language Learning* 34, 45-63.

古川武史.2006.「携帯型 HDD 録音提示装置による（自習）英語学習システムの構築」福岡工業大学情報処理センター運営委員会編.『福岡工業大学　平成17年度 e-Learning 関連教育手法研究開発プロジェクト報告書』

Johnson, K. and H. Johnson. 1998. *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics*. Blackwell.

ホーリー，ショーン・赤川　裕.1996.『丁寧度別英語表現510』研究社.

Krashen, Stephen. 1987. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Prentice-Hall International.

McDonough, S. 1995. *Strategy and Skill in Learning a Foreign Language*. Arnold.

村野井仁.2006.『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.

O'Malley, J.M., A. U. Chamot, G. Stewner-Manzanares, L. Kupper, and R.P. Russo. 1985. "Learning strategies used by beginning and intermediate ESL students," *Language Learning* 35, 21-46.

Oxford, Rebecca L. 1990. *Language Learning Strategies*. Newbury House.

Scarcella, Robin C. and Rebecca L. Oxford. 1992. *The Tapestry of Language Learning: The individual in the communicative classroom*. Heine & Heine Publishers.

Tarone, Elaine. 1980. "Communication strategies, foreigner talk and repair in interlanguage.' *Language Learning* 30:417-31.

Tarone, Elaine. 1981. "Some thoughts on the notion of communicative strategy." *TESOL Quarterly* 15:285-95.